

## 小手姫の事蹟と女神山（史考）

小手姫はどんな家柄に生まれ、どんな身分の方であつたかを、天皇の系譜及び、大伴家の家譜を調べて見た。

一、日本書記崇峻天皇のころ（三十二代天皇）

崇峻元年春三月、大伴糠手連の女小手子を立てて妃となす。

一、敏達天皇十二年、百濟より日羅等吉備国児島の屯倉に来る。朝廷大伴糠手子連をして慰勞せしめ任那みまな再建の策を詔問せしむ。（日本書紀卷二〇に依る）

一、小手姫の祖父金村は摠体天皇の擁立者であり安閑、宣化の三朝に亘り大臣として全権を振り、欽明の初め物部氏は蘇我の馬子によって失脚し、その後蘇我權勢の独壇場となる。

天皇家の系譜から見ても、大伴家の家譜から見ても小手姫は天皇家と婚姻するだけの資格ある豪族の生まれである事がわかる。ではそのような家柄に生まれて何故蚕や糸機の技術が具えられたか疑問となるが、百濟より一生に三度替る宝の虫として欽明天皇十二年に献上され天皇もこの虫をご覧になった記録もあり、わが国の蚕の始めとされる。当時は皇后も皇妃も自ら蚕を飼ひ糸をとり機を織つて皇子や皇女の衣とした事は歴史上歴然とした事実であり、また百濟から来た技術者に付いて習われるのは朝廷と、ごく一部の豪族の家庭であつたであろう。そうした環境にあつた小手姫は十一、二才頃よりその技術を学ばれた。従つて蚕の飼育、糸とり、機織りまで十分に技術を身につけておいでになつたと考えられる。ではだれでも考える大和の